

あるかいど 第五十三号 夏号 目次

〔小説〕

尾根にて

象の足

ユキの朝

パンの味

夕映え

髪を切る

クロノス

夏の船

〔旅行記〕

2014・ドレスデンの手

〔エッセー〕

敗戦記

池戸 亮太

4

高原あふち

16

住田真理子

32

泉 ふみお

45

多紀 祥子

61

奥田 寿子

68

佐伯 晋

81

鵜瀬 順一

91

木村 誠子

99

善積 健司

110

〔小説〕

二日月の夜に
ふつかづき

逃げて行く場所

夢日記

夫婦鶴

スイカの種

ほくろ

カエル同盟

海峡

あなたは、だれ

森 かつら 120

向井 幸 132

高島 寛 144

田中美代子 167

南 遥 183

西田恵理子 194

奥畑 信子 202

池 誠 214

伊吹 耀子 227

あるかいど51・52号の反響

新人紹介

同人名簿

編集後記

245 244 243 242

表紙・扉絵 高原颯時
デザイン 村尾雄太

【あるかいど51・52号の反響】

■三田文学（新同人雑誌評）

二〇一四年春季号

○善積健司「ペランダの向こうへ」

伊藤 これは珍しく現代的な話で、主人公の洋介がゲームにはまってしまつて、ひきこもりになつてしまう。親はどうしてよいかわからず、父親は完全に息子を疎んじているんですけども、結局どうしようもない。一人称で書かれています。自己客観視が上手くできていなくて、だからこそこうなつてしまふんだ、という書き方をあえてしているのか、それとも作者としても見えていないだけなのか。ちよつとわかりませんでした。とにかく閉塞したどんづまりで、母に対してはかなりわがままで横暴な要求をするところがあるが、非常に現代的だなと思えました。

勝又 ゲームやチャットつていうのか、パソコン画面上で話に参加したり、会話

したり、そういう世界になるほどなところがあるけれどもありました。こういう関連はよく読みますが、ここでは洋介と話し相手のカスガさんが実際に会つて、そちらに話が展開するかと思つたが、それでもなかった。ネット上の交際つて、これはつまりキャラクターの世界なんだね。自分で設定したキャラクターを一生懸命演じてお芝居ごっこをしている。生の人間はいろいろな面を持つているから現実には一面じゃすまないんだけどネットでは何かの性格を一つ設定するとそれですんでしまう。そういうこととずっと押し通す、そんな関係なんだとこれを通して知つた。パソコンでの会話も漫画のやり取りみたいで、つまり幼稚。それが作品全体も支配していて、父親は息子に文句があるんだけど、それが行動としては茶碗を壁に投げつけて「洋介のせいや」と叫ぶだけ。父親もゲーム世界の人間と全く同質。生きた父親としてのリアリティがない。これが今の小説のパター

ンだなどという感じでした。筒井康隆から

いから始まった現代小説の悪い性格ですね。この父親も内面があつていいはずだけど作者は全然入つていらない。母親もそれらを許しちゃつていただけで、本当はおろおろしているはずなのに、そういうところもない。チャット中のキャラクターとしての付き合いと現実の付き合いが一緒になつていて。

伊藤 この主人公も小説を書いていて、これが今の文学青年の成れの果てなんだろうなと思えますね。おそらく読むものもネットで読めるようなものなのでしょう。それから、カスガさんだけに向かつて書いていて、他の周りの人、全く見知らぬ不特定多数に評価してもらおうという意識もない。そこもすごく閉塞的です。視点がすべて自分のいる場所で閉じているあたりも、でも今、こうなんだろうと思えますね。

勝又 そうなんだ。僕らは世代が違うから、自然に距離を置いて見てしまうけど、書いている人はそんなに距離がないらしい。

伊藤 客観視していませんよね。
勝又 現にある現象を並べてるだけだという感じもしました。

○田中美代子「明けの雪」

伊藤 同じ雑誌から、田中美代子「明けの雪」も面白かったです。

勝又 いい話なんだけど、太秦の広隆寺の弥勒菩薩と顔が似ていたとか、高校生にしては少し渋すぎる。

編集部 前回の作品とあわせて「文藝界」

への推薦作をお願いします。

勝又 今回の一番と比べると、前回の

奥田寿子「女ともだち」「あるかいど」

のほうが、つまり純文学かな。

伊藤 あれはよかったです。

勝又 全体的に、前回のほうがよかったです。

もう一篇も前回からで、夏当紀子「しゃ

ぼん玉みたいに」(「飢餓祭」)はどうで

しょう。一度優秀作で転載したことのある

人ですが。

伊藤 いいと思います。

〈新人紹介〉

西田恵理子さん

嗅覚を主体に周りの風景を描写しながら、幼年時代を回想するユニークな作品「匂い」、芥川の「トロッコ」を彷彿させ、郷愁をさそう山里の少年の物語「冬のほたる座」(通教作品集)。地道な努力が結実したのが、昨年の樹林(秀作の樹)に掲載された「琥珀」。五感を駆使した描写と、ゆたかな絵画的イメージが彼女の武器である。作品に山峡の匂いがただよるのは、高梁市(岡山)在住のためか。個性的な書き手の参加を心から歓迎したい。

〈プロムナード〉

●津市の書店で「文藝界」五月号を購入した。二〇一四年上半年同人雑誌優秀作「女ともだち」、奥田寿子の名前をみたくき胸が熱くなった。それから間もなく大

阪文学学校賞の発表があり、(詩部門)佳作入賞で、ふたたび彼女の名前が！彼女の圧倒的な読書量が、いよいよ真価を発揮してきたと見るべきだろう。ますますの飛躍を祈っている。

●今号掲載、善積健司のエッセイ「敗戦記」は、昨年の大阪文学学校賞(エッセイ部門)で奨励賞を受賞した作品。ラッパの苦闘が描かれるが、そこはかたくなくベロソスが漂う。リズムを取りながら読むと楽しい。彼の読書量も半端ではない。書ける人は読む。読む人は書ける。エッセイ・小説・ラップ・すべてこなせる彼の若さがまぶしい。評論にも挑戦したいという。彼ならやれるだろう。

(文責 佐伯)

編集後記

■あるかいどに、初めて拙作を掲載していただいたのが四十一号でした。それからちょうど丸四年を迎えたこの五十三号から、編集委員をつとめさせていただくことになりました。■健筆で真摯な新人数名の入会で、事前合評は八時間近くに及び、打ち上げのビールが、爆発寸前の脳みそを直撃。この高揚と興奮は、はたして体にいいのかわいのか、疲弊した頭で考えてみた。■ただ一つ確かなのは、今回の一九作品を前に読み込み作業をしている時、自分が今、ここに生きていると、実感していたこと。五感が新たな刺激を得て、たぎるようだった。■あとは、美容的效果を祈るのみ。(あふち)

■「継続は力である」というのは文学学校のキャッチフレーズの一つである。誰がアフターケアをし

ているかといえば、文校周辺の数多くの同人誌である。その同人誌の一番多くの集団を主催しているのが、奥野と私だ。■「セル」と「あべの文学」「あるかいど」と「空とぶ鯨」共に二つの同人誌と合わせてそれぞれ四十五人程度が参加している。文校は一組一五人の定員だから、合計六クラスになる。「セル」は五、六人のチューターを輩出した。「あるかいど」は四、五人文校賞の書き手がいる。■「セル」が創刊したのは、小島輝正が理事長に就任し、第二次文学学校がスタートした一九八〇年の一、二年前、「あるかいど」はその一、二年後であり、共に三十年以上の歴史がある。■今年文学学校は六〇周年を迎えた。幸い朝井まかでさんが直木賞を受賞し、新人生が昨年倍の一四〇人になり、大きな花束をいただいた。(寛)

あるかいど 53号

発行日 2014年7月20日
頒 価 1000円(送料別)

発行人 高島寛
編集人 佐伯晋
編集委員 木村誠子 山田泰成 小西九嶺 多紀祥子 池戸亮太 高原あふち
発行所 〒545-0042 大阪市阿倍野区丸山通2-4-10-203 高島方
Tel: 06-6654-1750
制 作 (株)セイエイ印刷
〒536-0016 大阪市城東区蒲生2-10-33
Tel: 06-6933-0521 Fax: 06-6933-0241
E-mail: seiei@mbm.nifty.com